紹介

帆刈　浩之著

『越境する身体の社会史
――華僑ネットワークにおける慈善と医療――』

本書は著者の既発表論文をまとめた初の単著である。著者は日本でも数少ない香港をフィールドとする東洋史研究者であり医療社会史を専門としている。近代中国研究において西洋文明との接触・受容は大きなテーマの一つであり、その中でも医療衛生問題は、近年では飯島渉氏などを中心に多様な視点から研究がなされている分野である。

はじめに本書の主要な分析対象である香港東華医院について説明しておく。一八七〇年に設立された東華医院は、その運営が全て華人によって担われ、香港の華人を代表する機関として香港政庁・清朝の双方とつながりを持っていた。当初は中国医療のみを提供する病院として成立したが、一八九四年のペスト流行以降漸次西洋医療が導入され、第二次大戦後中国医療の提供は終了するも、現在でも香港の中心的病院として存続している。

それでは本書の構成を紹介していこう。本書は大枠として二部構成となっており、第一部は東華医院を中心とした様々な個人・団体との関係性について、第二部では近現代中国における医療の「近代」化について論じている。

まず第一部第一章で香港における近代医療の展開過程を衛生の制度化、病院の性格、初期の西洋人の活動という観点から概観したあと、第二章以降で東華医院が果たした役割が検討される。第二章では中国慈善の研究史を整理し、そこに香港の東華医院を位置付ける。その創設過程と主な活動を概観した上で、特に災害救助活動における広東省及び香港政庁との関係性を示す。続いて第三章では施棺、移動、病院やビジネスのネットワークという事例を取り上げて、東華医院と海外の華僑華人との重層的ネットワークの存在を提示した。最後に第四章では西洋近代の衛生思想に基づく衛生行政の制度化や、疫病の流行によって善会善堂の流れを組む同郷会館や慈善医院の活動が変容を強いられる過程が、上海の寧波人の団体である四明公所と東華医院の事例に基づいて説明される。

続いて第二部であるが、第一章では民国期を扱う。制度としての西洋医学が導入されるに及び、対立概念として中国医学が再構築されたが、それは二元論ではなく、中医の存続が目的だった。第二章では新中国成立後、中国医学が近代西洋医学によってその特質を理解しようとする「伝統中国医学」として発展し、一方海外華僑社会では独自に中国医学が現地化され、今日では双方が国際的ネットワークの中で結びつく過程が明らかにされた。そして其の個別事例として、第三章で返還後の香港における中国医学制度化の過程が論じられる。

本書の研究上の意義は以下の二点にある。一つは東華医院を善会善堂を中心とする社会史、慈善史の文脈に位置づけた点であり、いま一つは華僑華人の社会的ネットワークを明らかにした点である。中国近代史では前近代と近代の連続・断絶がしばしば焦点となる。たしかに西洋衛生思想の導入によって東華医院は変容を余儀なくされた。一方で東華医院を中継とする同郷・同業のま

とまりによる重層的なネットワークはその後も維持されたことを本書は明らかにした。中国文化の伝統的な「越境性」は変わることはなかったのである。ある社会集団における西洋文明と伝統文化の共存の在り方を示すものとして、本書が提示するモデルは非常に興味深い。是非ご一読をお薦めしたいと思う。

（A5版　三六八頁　二〇一五年一月
風響社　税別四〇〇〇円）

（小堀慎悟　京都大学大学院修士課程）

波田野節子著
『李光洙――韓国近代文学の祖と「親日」の烙印』

本書は、李光洙（イ・グァンス）（一八九二～一九五〇?）の生涯をたどった評伝である。本書の副題にあるとおり、李光洙は「韓国近代文学の祖」であると同時に、「親日」作家として、その名前が記憶されてきた。一九一九年の三・一独立運動の先駆けとなった二・八独立宣言を起草し、上海に亡命、大韓民国臨時政府に身を投じ機関紙『独立新聞』の主筆をつとめるなど民族運動家としての名声もある。著者が述べるように、仮にそのまま上海で客死していたら、輝かしい「民族の英雄」としてその名が記憶されたであろう人物だ。

しかし、上海から朝鮮へ戻り一九二二年に発表した「民族改造論」で朝鮮民族の「道徳的悪習」と「改造」の必要性を説いて物議を醸した。それでも日中戦争下に治安維持法違反で逮捕された際に仮に獄死していれば「民族の英雄」として記憶されたかもしれない。しかし逮捕後に親日的な言動を積極的に行うようになり、解放後には「民族反逆者」として激しく非難された。一九四九年に反民族行為処罰法により逮捕収監され（最終的には不起訴）、朝鮮戦争中の一九五〇年七月に朝鮮人民軍に捉えられ、平壌に移送され同年病死したとされる。

著者の波田野節子氏は、一九八〇年代から長年にわたり李光洙研究に取り組んできた朝鮮文学研究者である。李光洙の代表作の長編小説『無情』を翻訳（平凡社、二〇〇五年）したほか、『李光洙・『無情』の研究――韓国啓蒙文学の光と影』（白帝社、二〇〇八年）、『韓国近代文学研究――李光洙・洪命憙・金東仁』『韓国近代作家たちの日本留学』（二冊とも白帝社、二〇一三年）など本書の基盤となる研究書を通じて、主に李光洙の「近代文学の祖」としての側面を追究してきた著者が、李光洙の「人生の後半」、すなわち「親日」の側面も含めて新書として書き下ろしたのが本書である。李光洙について一般向けに日本語で書かれた評伝は本書が初めてである。前述のように評価をめぐって議論が多い人物であるが、本書は性急な評価は避け、文学研究者らしい丁寧なテクスト解釈とともに、李光洙が生きた時代と空間、その葛藤を追体験するかのように読み進むことができる優れた評伝である。

評者は以前、李光洙を紹介するコラムで「日本で言えば夏目漱石のように紙幣になってもおかしくないほどの位置にある作家でありながら、『民族反逆者』『民族の汚点』として糾弾される李光洙のような人物をうんでしまった、日本による朝鮮植民地支配とは何だったのか。日本（人）こそがこの問いを問い続ける必要があるだろう。」と書いた（『東アジア近現代通史』六、岩